

木曾川

北原白秋

青空文庫

一

「ほら、あれがお城だよ」

私は振り返った。私の背後からは円い^{まる}麦^{むぎ}稈^{わら}帽^{ぼう}に金と黒とのり
ボンをひらひらさして、白^{しろ}茶^{ちや}の背広に濃い花色のネクタイを結
んだ、やっと五歳と四ヶ月の幼年紳士がとても潔^{いさぎ}よく口をへの字
に引き緊^しめて、しかもゆたりゆたりと歩いていた。地^じ蔵^{ぞう}眉^{まゆ}の、
眼が大きく、汗がじりじりとその両の頬に輝いている。

名^め鉄^{いてつ}の電車^{でんしゃ}を乗り捨てて、差しかった白^{しろ}い白^{しろ}い大鉄橋^{だいてつきょう}——
犬^{いぬ}山^{やま}橋^{はし}——の鮮^{あざ}かな近代風景の裏のことである。

暑い、暑い。パナマ帽に黒の上衣うわぎは脱いで、抱えて、ワイシャツの片手には鶏にわとりの首のついたマホガニーの農民美術のステッキをついてゆく、その子の父の私であつた。

「うん、そうか」

父と子とはその鉄橋の中ほどで立ちどまると、下手しもて向きの白い欄干らんかんに寄り添って行つた。隆太郎りゅうたろうは一所懸命に爪立ち爪立ちした。頤あごが欄干の上に届かないのだ。

ちようど八月四日の正午、しんしんと降る両岸の蟬時雨せみしぐれであつた。

汪洋おうようたる木曾川の水、雨後の、濁つて凄まじく増水した日本ライン、噴き騰あがる乱雲の層は南から西へ、重ちようじよう畳して、何か底そこ

こひかり

光のする、むしむしと紫に曇つた奇怪な一脈の連峰をさえ現
 出している、その白金の覆輪がまた何よりも強く眼を射つた
 のである。その下流の右岸には秀麗な角錐形の山（それは夕
 暮富士だと後で聞いたが）山の頂辺に細い縦の裂目のある小
 松色の山が、白い河洲の緩い彎曲線と程よい近景を成して、
 遙には暗雲の低迷したそれは恐らく驟雨の最中であるであらう
 と、ところの伊吹山のあたりまでをバックに、ひろびろと霞んだうち
 展けた平野の青田も眺められた。

その左岸の犬山の城である。

まことに白帝城は老樹蓊鬱たる丘陵の上に現れて粉壁

鮮明である。

小さな白い三層楼さんそうろう、何と典麗てんれいなしかもまた均齊した、美しい天守閣であろう。この城あつて初めてこの景勝の大観は生きる。生きた脳髓であり、レンズの焦点である。まったくかの城こそは日本ラインの白い兜かぶとである。

「お城には誰たれがいるの」

「今は誰たれもいないんだ。むかしね兵隊がいたんだよ」

私はその子の麦稈帽むぎわらぼうを軽くたたいた。かの小さな美しい城のはつこうはつこう白光はくわくが果はたしていつまでこのおさない童子どうしの記憶あかに明り得るであろうか。そしてあの蒼空が、雲の輝きが。

父はまたその子の麦稈帽を二つたたいた。私は心ひそかに微笑した。「すこし強くたたいて置け」。

私の長男である彼隆太郎は、神経質だが、意思は強そうである。一緒に行く、機関車に取りついてでもついて行くといつてきかないので、やむなく小さなリユックサックを背負わして連れて出たものだが、下りの特急の展望車で、大きな廻転椅子に絵本をひろげていた時にもこの子は一個の独自の存在であつた。食堂のテーブルに向い合つた僅な時間のひまにも、この子はおぼつかないながら、ナイフとフォークとは確に自分の物として、焼きたてのパンや黄色いバタや塩っぱいオムレツの上にのぞんで、決して自分を取り乱さなかつた。箱根の嶮路にかかつて、後部の大きな硝子戸に、機関車がぴったりとくつつき、そのまま轟々と真つ黒い正面をとどろかして押し昇つた時にもそれを見たこの子は、それこ

そひとりで大喜びであつた。その夕方、名古屋の親戚の家の玄関に立つた時にも、別に鼻白みもしなかつた。彼が生れた日だけしか彼を見なかつたその伯母おばさんが「ほう、おまえが隆坊。まあ大きくまりましたね、おお。よく似ているわね、うちの子に。ほほほ」。

よくまあお父さんについて来られましたね、と驚いて、その式きだい台で微笑された時にも、この子はうんとだけいつて笑つた。そうして自分で靴をぬぐとすぐに飛び込んで行つた。生みの母に初めて離れて遠い旅に出るこの子に、この子の母はよくいつてきかした。「ね、坊や。自分のことはみんな自分でするのですよ」。

だから、その晩にも、かれはひとりで必死になつて上衣を脱い

だり、パンツや、シャツの釦ぼたんをはずしたり、寝衣ねまきに着更きかえたり、帯を結んだり、寢床にころがつたり、眠つたりした。

その翌朝の今日のことである。柳橋やなぎばし駅から犬山橋までの電

車の沿線には桑くわが肥え、梨が実り、青い水田のところどころには、

ほのかな紅あかい蓮はすの花が、「朝」の「八月」の香においを爽さわやかな空気と

日光との中に漂わしていた。そうしたがすがしい眺めと薫かおりと

をこの子はどんなに貪むさぼり吸ったことか。父とまた初めて旅するこ

の子の瞳はどんなに黒く生いき々と燃えていたことか。そうして酒し

徒ゆととしての私にはやや差し障りそうな道連みちづれではあったが時とす

ると侮あなどり難い小さな監督者であろうも知れぬが、だが、私自身に

も寧むしろ或あるいはそれを望んだ心もちもあつた。

私はわが子の両手を強く握った——よく一緒に遣^やつて来た。来てほんとによかったのだ。

まことに白^{はく}帝城^{ていじょう}は日本ラインの白^{かぶと}い兜^{かぶと}である。

おお、そうして、白^{ろう}い臍^{ろう}たけた昼のかたわれ月が、おお、ちようどその白^{はちまんざ}い兜^ざの八幡座にある。

白帝城に登ったのは、その上の麓^{さいうんかく}の彩雲閣^{さいうんかく}（名鉄経営）の楼^{ろう}
上^{うじょう}で、隆太郎のいわゆる「香^{にお}いのする魚^{うお}」を冷たいビールの
乾杯^{そうかい}で、初めて爽快^{そうかい}に風味して、ややしばらく飽満^{ほうまん}した、そ
の後のことであつた。

その白帝園の裏手から葉桜の土手を歩いて右へ、緩^{ゆる}るいだらだ
ら阪^{さか}を少しのぼると、犬山^{いぬやま}焼^{やき}の同じ構えの店が並んでいる。そ

れから廻ると、公園の広場になる。ところで、極彩色の孔雀くじやくが
 きらきらと尾羽おばを円まるくひろげた夏の暑熱しよねつと光線とは、この旅に
 ある父と子とを少すくなからず喜ばせた。その隣の檻おりの金網の中には嬉き
 戯ぎする小猿が幾匹となく、頓とん狂きやうに、その桃色の眼のまわりを
 動かすのである。

そうだ、ここだったなと私は思った。金きんと黝朱うるみの羽根の色をし
 た鳶とびの子が、ちようどこの対むかいの角かどの棒杭ぼうぐいに止とまっていたのを観み
 た七、八年前のことを憶おもい出したのである。私はあの時木兎みみずくか
 と思つた、ちかぢかと寄つて見る鳶は頭のまるい、ほんとに罪の
 ない童顔どうがの持主であつた。

そうだった、これが針綱はりつな神社だったと私はまた微笑した。

あの冬の名古屋市はまったく恐怖と寒気とで、その繁華な、心臓の鼓動もとまりそうであつた。悪性の流行感冒かんぼうは日に幾十となくその善良な市民を火葬場に送つた。私もまた同じ戦慄せんりつのうちびようがに病臥して、きびしい霜しもと、小さい太陽と、凍つた月の光ばかりとを眺むるより外ほかなかつた。旅で病むのは何と心細かつたことだろう。それに私は貧しいかぎりであつた。島村抱月先生の傷いたましい訃報ふほうを新聞で知つたのもその時であつた。

今、私の愛児は、幼年紳士は、急斜面の弧状の、白い石の太鼓橋らんかんを欄干らんかんにつかまり遮しやにむに二無二はい登ろうとしている。一行の誰たれかれが哄笑こうしょうして、やんややんやと背後うしろから押しあげている。隆太郎は嬉々ききとして声を立てる。やつと上のぼつたところで、半ズボ

ンの両脚を前へつるつるつるである。父の私も前廻りして手をう
つて囃^{はや}し立てる。

昔と今と、変れば変わるものだ、私は思う。そうだ、あの頃は
まだ日本ラインという名すらさして知られてなかったのだ。

「日本ラインという名称は感心しないね、卑下と追^つ従^いと生ハ
イカラは止^よしてもらいたいな。毛唐^{けとう}がライン川をドイツの木曾川
とも蘇^{そせん}川峡とも呼ばないかぎりはね。お恥^{はず}かしいじゃないか」

「そうですね、日本は日本で、ここは木曾川でいいはずなんで」

木曾川 橋^{きょうはん} 畔^{はん}の雀のお宿の主人野田素峰^{そほう}子が直^{すぐ}と私に和した。

「みんながよくそういいますで」

私たちはいつのまにか、城の正面の柵内にはいりつつあった、

軽い足どりで。

浴衣ゆかたに袴はかまの、白扇はくせんを持った瘦せ形の老人が謹厳きんげんに私達を迎

えた。役場から見えていたのである。

旧記に観ると、この犬山の城は、永享えいきょうの末に斯波氏しばの家臣

織田氏おだがこの地を領し、斯波満桓みつたけが初めて築いたとある。斯波

氏が滅びてから織田、徳川の一族が拠よつて武威ぶいを張った。小牧こまき

山合戦まの際には秀吉も入城したことがあったというのだが、天

下が家康に帰してからは、尾州侯びしゅうの家老成瀬隼人なるせはやとが封ほうぜられ、

以来明治維新まで連綿として同家九代の居城として光った。

現存の天守閣は慶長四年の秋に、家康が濃州のうしゅう金山かなやまの城主

森忠政もりただまさを信州川中島てんぽうに転封したおり、その天守閣と楼櫓やぐらとを

時の犬山城主石川光吉に与えた、それを明^{あく}る年の五月に木曾川を下^{くだ}してこの犬山に運び、これを築きあげたものである。斎藤大^{だいな}納言正成^{ごんまさしげ}の建築だそうである。

この白帝城は美しい。その総合的美観はその位置と丘陵の高さとが、明らかにして洋^{よう}々たる河川の大^{たい}景^{けい}と相俟^{あい}つて、よく調和して映^{えい}照^{しょう}しているにある。加えて、蒼古^{そうこ}な森林相がその麓からうちのぼっている。展望するに、はてしない平野の銀と緑と紫の煙霞^{えんか}がある。山^{さん}城^{じょう}としてのこのプランは桃山時代の粹^{すい}を尽くした城^{じょう}堡^{ほう}建築の好模型だというが、そういえばよく肯^{うなず}か
れる。

ただ僅^{わず}に残^かつて、今にそびえる天守閣の正しい均斉、その高^{こう}ら

欄らんをめぐらし、各層に屋根をつけた入母屋いりもや作りのいらか、その白堊はくあの城。

外観こそは三層であるが、内部に入れば、それは五層に高まつてゆく。

その五層の、昔ながらの木の階段を昇る時、隆太郎は危くころびかけた。そうしてその従兄いとこの三高生から引つ抱えてもらった。

「何でこんなに暗いの、何でこんなに暗いの」
と、いいいいして上のぼつて来た。

「あ、名古屋城が見える」と、誰たれかが叫んだ。

天守閣の最上層の勾欄こうらんへ出たところで、私たちはまず両方の大平野を瞰望かんぼうした。きのう電車で駛はしつて来た沿線の曠田こうでんの緑

と蓮池はすいけの薄紅うすべにとが遙はるかに模糊もことした曇天どんてん光こうまで続いて、ただ一つの鬱うつくつ色らんしよくの濃い、低い小牧山が小さく鬱屈うつくつしている。その左にほうふつとして立つ紫の幻塔が見える、それが金の鱗うろこのお城だというのである。そう聞けば何か閃せん々せんたる気魄きはくが光っているようにもある。

その地平線は白の地に、黄と少量の朱と、藍あいと黒とを交ぜた雲かすみと霞とであつた。その雲と霞は数条の太い煤煙ばいえんで掻き乱ざされている。鮮麗せんれいな電光飾の輝く二時間前ぜんの名古屋市である。

東から北へと勾欄こうらんへついて眼を移すと、柔かな物悲しい赤と乾酪色チーズの丘陵のうねりが閑のどかな日光の反射にうき出している隣に、二つの円まるい緑の丘陵が大和絵さながらの色調で並んで、その一つ

の小高みに閑雅な古典的の堂宇が隠見する。瑞泉寺山だと人がいった。

瑞泉寺山から継鹿尾、鴉ヶ峰と重畳して、その背後から白い巨大な積雲の層がむくりむくりと噴き出ていた。そのすばらしい白と金との向うに恵那、駒ヶ岳、御岳の諸峰が競って天を摩しているというのだ。見えざる山岳の気韻は彼方にある。何と籠もったぶどう鼠の曇り。

と、蕭々として、白い鉄橋の方へ時雨るる蟬のコーラスである。

爆音がする。左岸の城山に洞門を穿つのである。奇岩突兀として聳え立つその頂上に近代のホテルを建て更に岩石層の縦の

トンネル
 隧道をくりぬき、しんしんとエレヴェーターで旅客を迎える計画だそうである。遊覧船は屋形やかた、或は白のテントあるいを張つて、日本ラインの上流より矢のように走つて来る。その光、光、光。あたたか 恰もレジエント中古伝説の中の王子の小船のようにちかりちかりとその光は笑つて来る。

「おうい」と呼びたくなる。

中仙道は鵜沼駅うぬまを麓とした翠巒すいらんの層に続いて西へと連るのは多度たどの山脈である。鈴鹿すずかは幽かに、伊吹いぶきは未だに吹きあげる風雲いのししの猪色いただきにその嶺を吹き乱されている。

眼の下の大河を隔てた夕暮富士を越えて、鮮かな平蕪へいぶの中に点々と格納庫の輝くのは各務ヶ原かがみの飛行場である。

西は渺々たる伊勢の海を眼界の外に霞ませて桑名へ至る石

びようびよう

はら

かす

くわな

船の白帆は風を孕んで、壮大な三角洲の白砂と水とに照り明つ

て、かげつて、通り過ぎる、低く、また、ひろびろと相隔たつ

あいへだ

た両岸の松と楊と竹藪と、そうして走る自転車の輪の光。

やなぎ たけやぶ

白帝城は絶勝の位置にある。

私は更に俯瞰して、二層目の入母屋の葢にほのかに、それは奥

ふかん

いりもやいらか

ゆかしく、薄くれないの線状の合歡の花の咲いているのを見た。

ねむ

樹木の花を上からこれほど近く親く観ることは初めてである。い

したし

かにも季節は夏だと感じられる。

絶壁の上の楓の老樹も手に届くばかりに参差と枝を分ち、葉を

かえで

しんし

交えて、鮮明に澄んで閑かな、ちらちらとした光線である。

のど

幾百年と経った大木の樟くすのきは樹皮は禿はげ、枝は裂けていい寂色さびいろに古びている。その梢こずえの群ぐんじよう青からすを鴉くろがはたはたと動かしてとま
る。かおオかおオである。古風な白帝城。

水道の取入口は河に臨んで、その城の絶壁の下にあつた。

私たちは城を降りると、再び暑熱しよねつと外光の中の点景人物とな
つた。ひらひらと、しきりに白い扇が羽ばたき出した。

公園からだだらの阪さかを西谷にしにの方へ、日かげをえら選み選み小急こきゅうぎになると、桑畑の中へ折れたところで、しおらしい赤い鳳仙ほうせん花かが目についた。もう秋だなど思う。

簡素な洋風の家がある。入口は開けっぱなしで、粗末な卓に何か仕事しているワイシャツの人がある。役場の老人が寄って行つ

て挨拶あいさつする。幽かすかに私の名をいつている。

私たちは洞門に入る。外へ出ると豁然かつぜんとひらけて、前は木曾の大河である。

この大河の水は岩礁を割さいた水道のコンクリートの堰せきと赤さびた鉄の扉ふたの上を僅わずかに越えて、流れ注いで、外には濁った白い水すい沫つと塵埃じんあいとを平らかに溜ためめているばかりだ。何なにの奇きもなく閑のどけさである。

「この水が名古屋全市民の生命をつないでいるのです」と詰襟つめえりをはだけた制帽の若者が説明する。

私たちは引返して、洞門をくぐると、二台の計量機の前に出た。幽かすかに廻かすっている円筒の方眼紙の上に青いインキが針にじから滲にじんで

殆ど動くか動かぬかに水量と速度とをじりじりと鋸形に印して進む。そこで若者は三和土の間の方五、六尺の鉄板の蓋を持ちあげる。暗々たる穴の底から冷氣が吹きあげる。水は音なく流れて、地下十八尺の深さを、遙の大会へ休むなく奔りつつ圧しつつある。しんしんとしたその奔入。

詩歌の本流というものもちょうどこうした深处にあつて幽に、力強く流るるものだ。この本流のまことの生命力を思わねばならない。

私は隆太郎の手をしつかと握った。

彩雲閣へ戻ると、小坊主は直と名古屋へ帰るといい出した。名古屋の伯母さんは昨夜、この子の母に長距離の電話をかけていた。

「病氣でもされると申し訳がありませんね。それにお菊さんもまだ一度も里帰りしないのですから丁度いい折ですし、呼びましようか」ということであつた。それに従^い兄弟^{とこ}たちは大勢だし、汽車や電車のおもちやはあるし、都会は壮麗だし、何か早く歸りたいらしかつた。

「じゃあ、そうするか、たのむよ」と私は甥^{おい}の三高生にその子を託した。

空は薄^{はく}明^{めい}となる、パツと園内のカンツリー・ホテルに電灯がつく。白、白、白、給仕とテーブル。

かえろかえろと、どこまでかえる。

赤い灯^ひのつく三丁さきまでかえる。

かえろが啼^なくからかアえろ。

並木の鈴懸^{すずかけ}の間を夏の遊蝶花^{ゆうちようげ}の咲き盛^{さか}つた円形花壇と緑の

芝生に添^そつて、たどたと帰^{かへ}つてゆく幼年紳士の歌声がきこえる。

「おうい」

私は二階の欄干^{てすり}へ出て両手をあげる。

「ほうい」

向^{むこ}うでもこちらを見て両手をあげる。

白いかたわれ月は朧^{ろう}たけて黄^{あか}に明^あつて来る。ほのかに白い白帝

城を、私の小さい分身の子供が、立^たつて停^{とま}つて仰^{あが}いでいる。

舟は遡る。この高瀬舟の船尾には赤の杵に黒で彩雲閣と奔
 放に染め出したフラフが翻っている。前に棹さすのが一人、後
 に櫓をこぐのが一人、客は私と案内役の名鉄のM君である。私
 は今日初めて明るい紫紺に金釦の上衣を引っかけて見た。藍
 いねずみ鼠の大柄のズボンの、このゴルフの服は些かはで過ぎて市
 中は歩かれなかった。だが、この鮮麗な大河の風色と熾烈
 な日光の中では決して不調和ではない。私は南国の大きい水禽
 のように碧流を遡るのだ。
 爽快である。それに泡だったコップのビール、枝豆の緑、はた
 めく白いテントの反射光だ。

五日の午後一時、昨日のすさまじい濁流はいくらか青みを冴^さえ立たして来たが、一旦^{いったん}激増した水量はなかなかひきそうに見えない。だが、裸の子供が飛び込む、飛び込む。燦^{さんさん}々たる岩の群^{むれ}と、ごろた石の河原と両岸のいきるる雑草の花とだ。

泳げよ泳げ。

左は楊^{やなぎ}と稚^{わかまつ}松と雑木の緑と鬱^{うつ}した青とで野趣^{やしゆ}そのままである

が、遊園地側の白い道路は直立した細い赤松の並木が続いて、一、

二の氷^{こおりみせ}店や西洋料理亭の煩^{はんざつ}雑な色彩が畸形^{きけい}な三角の旅館と

白い大鉄橋風景の右袂^{たもと}に仕切られる。鉄橋を潜ると、左が石^{せき}頭^{とう}

山、俗に城山である。その洞門のうがたれつつある巖^{がん}壁^{ぺき}の前に

は黄の菰^{むしろ}荳、バラック、鶴^{つる}はし、印^{しるし}半^{はん}纏^{てん}、小舟が一、二艘^{そう}、

爆音、爆音、爆音である。

と、それから、人造石の樺かばと白との迫持せりもちや角柱かくばしらばかり目だつた、俗悪な無用の贅ぜいを凝こらした大洋館があたりの均斉を突如と破つて見えて来る。「や、あれはなんです」。

「京都のモスリン会社の別荘で」とM君が枝豆をつまむ。

「悪趣味だ」

だが、ここまでである。それより上は全くの神斧鬼鑿しんぷきさくの蘇川峽そせんとなるのだ。彩雲閣わすかから僅に五、六丁足らずで、早くも人寰じんかんを離れ、俗塵ぞくじんの濁りを留めないところ、峻峭しゅんしょう相連あいつらなつて少すくなからず目をそばだたしめる。いわゆる日本ラインの特色はここにある。

日は光り、屋形の、三角帆の、赤の、青のフラフの遊覧船が三々五々と私たちの前を行くのだ。

遡航は氷室山の麓は赤松の林と断崖のほそぼそとした嶮道に

沿って右へ右へと寄るのが法とみえる。「これが犬帰でなも」

と後から赤銅の声がする。

烏帽子岩、風戾、大梯子、そこでこの犬帰の石門、遮

陽石というのだそうなの。

「ほれ、あの屋根が鳥瞰図を描くYさんのお宅ですよ」

幽邃な繁りである。蝉、蝉、蝉。つくつくほうし。

「この高い山は」

「継鹿尾山、叡光院という寺があります。不老の滝というのも

ありますが上あがつて御覧になりますか」

「いや、ぐんぐん遡のぼろう」

風が涼しい、潭たんは澄み、碧へきりゆう流は渦巻く。紫紺しこんの水禽みずどりは、
遡さかのぼる。遡る。

「あれが不老閣」

「閑静だなも」

と、これより先さき、中流に中岩というのがあつた。振り返ると、
いつになく左後ろ斜ななめに岩は岩と白い飛沫しぶきをあげている。

それから、千尺の翠巒すいらんと断崖は浣華溪かんかけいとなるのである。

波、波、波、波、波、

波、波、波、波、波、

波、波、波、波、波、波、

波、波、波、波、

波、波、波、波、波、

「爽快爽快」
そうかい

「富士ヶ瀬です」

すばらしい飛沫、しぶき飛沫、飛沫、奔流しつつ、飛躍しつつ、じょう擾

らん乱しつつだ。

一面淙々そうそうたり。

「や」

「赤岩です」とM君。

まさしく瑠璃るりの、群青ぐんじょうの深潭しんたんを擁ようして、赤褐色の奇巖きがんの

群々むれむれがかつと反射したところで、しんしんと沁しみみ入る蟬せみの声を
する。

稚わかい雌松めまつの林があり、こんもりとした孟宗もうそう藪やぶがある。藪の外
にはほのぼのとした薄くれないの木の花も咲いている。

「あれは何の木の花だね」

「漆うるしの花だなも」で、巧たくみに棹さおを操る舳ともの船頭である。白のまんじ
ゆう笠に黒色鮮あざやかに秀山靈水と書いてある。

そのあたりが栗栖くりすの里。

と、書き落おとしたが、その漆の花が目に入るまでに、石床いしどこの大

きなでこでこの岩、お富とみよそまつ与曾松の岩というのがあった。恋は悲し
い、遂ついに添つわれぬ身の果はてを嘆いて、お富もまた離ればなれに上かみの

手の岩から身を躍らしたと俚俗りぞくにいう。

「これがローレライで」

ローレライはちと苦笑される。

しんせきへき

新赤壁は左にあつた。その前を昔の中仙道が通つて、ひとつねると岩屋観音がある。白い汚れた幟のぼりが見える。

ここで再び蕭々しょうしょう

急湍きゅうたん

にかかる。観音の瀬である。

「まだひどい水で」と前ののがのめる。

やつのことで、その瀬をのぼり切ると、いよいよ河幅は狭くなる。いよいよ差迫さしせまつた奇岩怪石の層層層、荒削りの絶壁がまたこれらに脈々と連なりそびえて、見る目も凄い急流となる。惜しいことには水がたかく、岩は半没して、その神工しんこうの斧鉞ふえつの跡

も十分には見るを得ないが、まさに蘇川峡の最勝であろう。

斎藤拙堂の「木蘇川を下るの記」に曰く、

石皆奇状兩岸に羅列す、或は峙立して柱の若く、或は折裂して門の如く、或は渴驢の間に飲むが如く、或は臥牛の道に横たわる如く、五色陸離として相間わり、皴率ね大の斧劈を作す、間ま荷葉披麻を作すものあり、波浪を濯うて以て出ず、交替去来、応接に暇あらず、けだし譎詭変幻中、清秀深穩の態を帶ぶ。

兜岩、駱駝岩、眼鏡岩、ライオン岩、亀岩などの名はあらずも

がなである。色を觀、形を觀、しかして奇に驚き、しんおの神悸き、
きげん氣眩すべきである。

拙堂も觀た五色岩こそまた光彩陸離として衆人の目を奪うものであろうか。

ただ私の見たところでは、この蘇川峽のみを以てすれば、その
がんそう岩相の奇峭は豊ほうの耶馬溪、紀きの瀬八丁どろはつちよう、信しんの天竜峽にお
 よばず、その水流の急なること肥ひの球磨川くまにしかず、激湍げきたんはま
 た筑後川の或個処あるかしよにも劣るものがある。これ以上の大江たいこうとし
 てまた利根川がある。ただこの川のかれらに遙はるかに超えたゆえんは
 変幻極まりなき河川としての綜合美と、白帝城の風致と、交通に
 利便であつて近代の文化的施設余裕多き事であらう。原始的にし

てまた未来の風景がこの水にある。船は翠嶂山の下、深沈とした碧潭に来て、その棹をとめた。清閑にしてまた飄々としている。巉峭の樹林には野猿が啼き、時には出でて現れて遊ぶそうである。

私は舟より上つて、とある巖頭に攀じのぼった。

蓋し天女ここに嘆き、清軀鶴のごとき黄巾の道士が来つて、ひそかに丹を練り金を練る、その深妙境をしてここに夢み、或は遊仙ヶ岡と名づけられたものであらう。

遺憾なは「これより上へはどうしても今日はのぼれません」と舟人はまた棹をいっぱいに岩に当てて張り切ったことである。たちまち舟は矢のように下る。

千里の江陵こうりよう一日にかえる。

おお、隆坊たうぼうはどうしている。

自動車は駛はしる。

犬山の町長さんは若い白面はくめんの瀟灑しょうしやな背広服の紳士であつた。白帝園はカンツリー・クラブの大食堂で私たち三人——私と素峰子そほうしと運転手と——が、この八月六日の極めて簡素な午餐ごさんしたたを認めていた時に、たまたま給仕を通じて私に挨拶あいさつに見えた。はいつて来ると、名刺を一々運転手君にまでうやうやしく手交しゅこうした。若しもそうと知つてしたのならば美しいことだと微笑された。またそれほど黒背広の運転手君もひとかどの紳士らしく見えた。すなわち近代の日本ラインである。

カンツリー・クラブは緩い勾配の屋根の、錆色の羽目の中二階で、簡素ない趣味の建築である。バンガロー風で、正面と横とに広い階段がついている。その正面の階段の下、明るい色彩の花壇の前で、私は改めて一礼すると、車上の人となった。雀の宿の素峰子はきのうの朝から激しい胃痙攣で顔色がなかった。今日も案内がおぼつかないので、犬山橋駅に廻って、赤い腕章の旅客課の制帽君の同乗をたのむことにした。

自動車は駛る。鉄橋を北へ、まっしぐらに駛って行く。と、ちらつと、白帝城と夕暮富士とが目を掠める。

きのうの夕焼は実によかつたと思う。その返照はいつまでも透明な黄の霞んだ青磁や水浅葱の西の空に、紅く紅く地平の

積卷雲せきけんうんを燃え立たせた。そうして紫ばんで来た秀麗な夕暮富士
 の上に引きはえた吹き流し形の、天蓋てんがいの、華鬘けまんの、金欄きんらんの帯
 の、雲の幾流は、緋ひになびき、なびきて朱となり、褪紅たいこうとなり、
 灰銀かいぎんをさえ交えたやわらかな毛ばだちの樺かばとなり、また葡萄紫
 となつた。天守閣のかすかに黄に輝き残る白堊はくあ。そうして大江の
 勾深にがいい色の推移、それが同じく緋となり、褪紅となり、やわから
 な乳酪にゅうらく色となり、藤紫となり、瑠璃紺るりこんの上うわびかりとなつた。
 そうして東の瑞泉寺山ずいせんじに涌出ゆうしゅつした脳漿形のうしようがたの積雲と、雷
 鳴をこめた積乱雲との層が見る見る黄金色の光度を強めて今にも
 爆裂しそうに蒸し返すと、また南の葉桜の土手の空にもむくりむ
 くりと同じ色と形の入道雲が噴きあがっていた。この夕焼けもラ

インとよく似た美しい一つの天象だという。伊吹山の気流の関係で、この日本ラインにのみ恵まれた雲と夕日の季節の祭りである。私たちの軽舟けいしゅうは急流に乗って、まだ大円日だいえんじつの金の光輝くわいが十方に放射する、その夕焼けの真近をまたたく間に走り下つて来た。そうして白帝城下の名も彩雲閣の河原に錨いかりを下ろし纜ともづなをもやつたのであつた。と、名古屋から電話がかかつていて隆太郎の母は直すぐにも見えるはずだということであつた。

それが今日は生憎あいにく早そうぎよう暁あけからの曇りとなつた。四方よもの雨と霧と微々たる雫しずくとはしきりに私の旅情をそそつた。宿酔しゆくすいの疲れも湿つて来た。

この六日は下しもの河原で年に一度の花火の大会がある筈はずであつた。

名古屋の甥^{おい}たちや隆太郎にも見に来るように通知はしたが、それ
 もどうやら怪しくなつて来る。果然^{かぜん}雨天順延となつて、私の旅行
 日程にもまた一日の狂いが生じて来たので、無^{ぶり}聊^{りょう}に苦しむより
 は雨の日本ラインの情趣でも探勝しようかとなつた訳である。

自動車は駛^{はし}る。

と、気がつくといつ^{いつ}のまにか北へ向かつたので南へ駛りつつあ
 った。や、例^{かた}の樺^ばと白との別莊^{べつしょう}だなと思うと、中仙道は川添いの
 松原と桃林との間を東へ東へと驀^{もく}進^{しん}しつつある。

新^{しん}赤^{せき}壁^{へき}の裾を幾折れして、岩屋觀音にかかる。漢画風の山水
 である。トンネルがあり、橋がある。路^{みち}はやや沿岸を離れて桑畑^{くわ}
 と雌松^{めまつ}の林間に入る。農家がある。鳳仙^{ほうせん}花^かや百日草が咲き、村

の子が遊び、にわとり鶏がけけっこっこつである。高原の感じである。

秋、秋、秋、秋。

太田の宿しゆくにはいる。右へ折れて鉄橋を渡れば、対岸の今いまわたり渡から土田どたへ行けるのだが、それがライン遊園地への最も近い順路であるのだが、私は真直まつすぐにぐんぐん駛はしらせる。なるべく上流へ出て迂回しようと思つたのである。

ストツプ！ 古井こいの白い鉄橋の上で、私は驚いて自動車を飛び降りた。その相迫つた峡谷の翠みどりの深さ、水の碧あおくて豊かさ。何とまた鬱蒼うつそうとして幽邃ゆうすいな下手しもての一つ小島の風致であろう。煙霧は模糊もことして、島の向うむこの合流点の明るく広い水面を去来し、濡れに濡れた高瀬舟は墨絵の中の蓑みのと笠との舟人かこに操られてすべっ

て行く。

私たちがその青柳橋の上に立っていると、何が珍しいのかぞろぞろと年寄や子供たちが周囲にたかつて来た。この川はと聞くと飛驒川と誰か答えた。高山たかやまの上の水源地から流れて来てこの古井いで初めて木曾川に入るのだとまた一人が傍かたわらから教えてくれた。じゃあ、あの広いのが木曾川だなんて思えて来た。

「あの島にお堂が見えますが、あれは何様ですね」

こやま
「小山観音」

えんにち
「縁日でもありますか」

「ちょうど七月の九日がおかいちよう御開帳おかいちようでして、へえ、毎年です」

「店も出ましようね」

「ええ、河原は見世屋みせやでそれはもういっぱいになりますで」

水に映つて、それは閑雅な灯かんがひのちらちらであらうと思えた、こ

の支流である飛驒川の峡谷はまた本流の蘇川峡とは別趣きいんの氣韻を

もつて私に迫つた。上手かみての眺めにもうち禿た岩石層は少く、すべ

てが微光をひそめた巒らん色しよくの丘陵であつた。深沈しんちんとしたその

碧潭へきたん。

私たちはまた車上の人となる。藍あいねずみ鼠ねずみと燠いぶしぎん銀ぎんとの曇天、

丘と桑畑、台が高いので、川の所在は右手にそれぞと思つばかり

で、対岸の峰々や、北国風ほつくふうの人家を透かし透かし、どこまでも

と自動車は躍つてゆく。土の香かがする。草のかおりがする。雨と

空気と新鮮な嵐と、山蔭やまかげは咽むせぶばかりの松脂まつやにのにおいである。

駛る、駛る、新世界の大きな昆虫。

「見えた。あの鉄橋からまわりますか」

「よし」

そこでハンドルを右へきゅつと廻す。囂囂囂とそのつり橋を

渡つてまた右折する。兼山の宿である。と風光はすばらしく一

変する。爽快爽快、今来た峡谷の上の高台が向うになる。薄黄の

傾斜面と緑の平面、平面、平面、鉾杉の層、竹藪、人家思いき

り濃く、また淡く霞む。峰連山、雨の木曾川はその此方の田

や畑や樹林や板屋根の間から、突として開けたり離れたりする。

岩礁が見える。船が見える。あ、檜だ、瓦だ、絵看板だ。

遙にまた煙突、煙突、煙突である。あの黒い煙はと聞くと、あ

れは太田だという。よくも上まで来たものだと思う。いや、かれこれ二時間は走っていますと運転手が笑う。こうして兼山から伏見^{しみ}、伏見から広見^{ひろみ}、今^{いま}渡^{わた}りかつ飛ばすのである。

土田^{どた}は名鉄^{めいてつ}の犬山口から分岐する今渡線の終点に近い。ちらとその駅をのぞいて、また右へ、ライン遊園地へ向けて、またまた驀^{ばくしん}進驀^{ばくしん}進驀^{ばくしん}進である。行けるところまで行つて、危く何かにぶつかりそうにしてとまると、奇橋^{きし}がある。「土田の刎橋^{はねばし}」である。この小峡谷は常に霧が湧^やき易^{やす}くて、こめると上も下も深く姿を隠すという。重^{ちようじよう}畳^{じよう}した岩のぬめりを水は湍^{たぎ}ち、碧^{あお}く澄^{すみ}んで流れて、いうところの鷺^{さぎ}の瀬となる。

橋^{たもと}の袂^{しきしま}で敷島^{しきしま}を買つて、遊園地の方へほつりほつりと私たちが

は歩いてゆく。雨はあがりかけて日の光は微かに道端の早稲わせの穂にさしかけて来る。七夕たなばたの紅あかや黄や紫の色紙がしつとりとぬれにじんでその穂や桑くわの葉にこびりついている。死んだ蛭ほたるのにおいか何かが咽むせんで来る。あけつばなしの小舎こやがある。蚕糞こくそや繭まゆのにおいがする。蕙むしろが雑然と積んである。表に「自転車無料であずかります」と貼はり札ふだしてある。この道七、八丁。

宏こう壮そうな北陽館の前に出る。二階の渡り廊下の下の道路を裏へ抜けると、ここに驚くべき大洞可児合だいどうかにごうの壮観が眼下に大渦巻をまきあげる。断崖百尺の上の、何と小さな人間、白の黒の紫紺しこんのぽつり、ぽつり、ぽつりだ。

大洞可児合は蘇川そせん中の一大難所である。その本流と可児川かにの合がつ

するところ、急きゆうほん奔し衝突し、抱合し、反撥する余勢は、一いつた

旦ん、一大鉄城てつじようのごとく峭立しやうりつし突出する黒褐こつかつの岩石層

の絶壁に殺到し、遮断されて水は水と撃うち、力は力と抗さち、波は

岩を、岩は波を噛んで、ここに囂ごうごう々、淙そうそう々の音を成なしつつ、

再び変圧し、転廻し、捲騰けんとうし、擾乱じようらんする豪快無比の壯觀を

現出する。藍あいと碧あおと群ぐんじよう青と、また水浅葱みずあさぎと白と銀と緑と、

渦うずと飛沫ひまつと水漚すいおうと、泡と、泡と、泡と。

膚はだえあわ栗はだえあわを生ずとはこのことだろう。私は驚いて数歩下くだつた。

そこで、また踵くびすをめぐらして岩角がんかくと雑草の間の小径こみちを香木かうぼく

峽の乗船地へと向むかつておりた。

しかも明るくひろくうち開けた上流の空の、連峰と翠巒すいらん、濛も

うもう

々たる田園の黄^{こうりよく}緑、人家、煙。霧、霧、霧。

どこかで茶でも飲もうではないか、茶見世^{ちやみせ}ぐらいはあるだろう

といえ、ありますありますと答えながら、赤い腕章の制帽はそ

れでも一軒の葭簀^{よしず}の茶亭は通り越してしまう。途中に白いペンキ

塗の洋館の天狗何々^{なになに}と赤い看板を出したそのドアの前にかかつ

たが、窓のガラスもことごとくしめきつて「当分休業中」であつ

た。夏でもここまでの遊覧客はさして見えないらしい。ライン遊

園地もまだ完成しないで、自然の雑木原^{ぞうきはら}に近い。窪地にスケー

ト・リンクなどがあるくらいだから沍寒^{ごかん}はきびしいのであろう。

崖の縁^{ふち}へ出ると漸く休憩所の一つを見出した。人の気配もせぬの

で、のぞいて見ると隅^{すみ}つこの青く透^すいたサイダー瓶の棚の前に、

りんこう 鱗光の河魚かわうおの精おやじのような爺おやじが一人、しよぼんと坐まっていた。

ぼうと立つのは水氣すいきである。

すいしょう 翠嶂すいしょう

山と呼ぶこのあたり、何かわびしい岩礁いはくさと白砂との間

に高瀬舟の幾つかが水にゆれ、波に漂つて、舷々げんげん相摩あいまするところ、

誰たれがつけたかその名も香木峽かきがふという。左に碧あおくそそり立つの

が碧巖峰へきがんほうである。

そこで屋形の船のひとつを私は小手招こてまねく、そここの薄墨うすずみの、

また朱のこもった上の空の、霧はいよいよ薄れて、この時、雲の

きれ間から、怪しい黄色おうじきの光線が放射し出した。これからまた

ひとしきりなぎになつて蒸し暑く蒸し暑くなるのである。

「じゃあ、ここでお別れします。私は土田どたへ出てこの山の裏手を

廻つて帰りますが、どちらが早いかわひとつ競争して見ますかな」

自動車の運転手が笑った。

「よかろう」と私たちは舟に乗り込む。船頭はやはり二人で、棹をつつと突張るや否や、後のが櫓ベそを調べると、櫓をからからとやって、「そおれ出るぞお」である。

白帝城下まで二里半だということである。

舟は走る、五色の日本ライン鳥瞰図が私の手にある。

「ほう、あれが少女の滝かね」その滝は左の緑蔭から懸つて

あまりに幽かな水の線、線、線であつた。

右にうずくまるのがライオン岩、深巖として赭黒である。

と、舟は直に遊仙ヶ岡の碧潭にさしかかる。

その仙境を離れると、流れはいよいよ急である。昨日に比して
 少^{すくな}からず減じた水量のために河中^{かちゅう}の巖石^{がんせき}という巖石は、こと
 ごとく高く高くせり上^{あが}つて、重積した横の、斜^{ななめ}の斧劈^{ふへき}も露^{あらわ}に千
 状^{せんざい}万態^{ばんたい}の奇景を眼前に聳^{しょうりつ}立^{りつ}せしめて、しかも雨後の雫^{しずく}は燦^{さん}
 んさん
 々と所在^{ざん}の岩角^{がんかく}、洞門にうち響きうち響き、降るかとはかり
 に滾^{こぼ}れしきる。

河峡はいよいよ狭く、流れはいよいよ急に、舟は危うく触れん
 として聳^{しょうがん}岩^{がん}絶壁のすれすれを走り下^{くだ}る。

「や、あれは」

と、目をみはった。

一羽、ふり仰ぐ一大岩壁の上に黄褐^{こうかつ}の猛鳥、英氣颯^{さつ}爽^{そう}とし

てとまつて、天の北方を睨にらんでいる。鉤形かぎがたの硬嘴こうし、爛々らんらんたるその両眼、微塵みじんゆるがぬ脚爪あしづめの、しつかと岩角がんかくにめりこませ、そしてまた、かいつくろわぬ尾の羽根のかすかな伸び毛のそよぎである。

「鷹たかだね」

「え、」と驚いて旅客課「そうです。鷹です」

冷氣一道に襲つて、さすがに蘇川そせんは深山幽谷の面影が立った。

「身動きもしないんだね、船が下を通つても」

私は驚いたのである。

心音の動悸どうきが止やまぬのに、またしても一羽、右手の駱駝岩らくだの第一の起隆の上に、巖然げんぜんとしてとまっている。相對した上の鷹、

おそらくはつがいであろう。

いいものを見たとは私は思った。野猿やえんの声こそは聞けなかったが、

それにも増して私は偶然の、時の恩寵おんちようを感じずにはいられなかった。

私は幾度も幾度も振返ふりかえった。

激湍げきたん、白い飛沫ひまつの奔騰ほんとうする観音の瀬にかかつて、舟はゆれ

にゆれて傾く。

鷹は絶壁はるかの遙はるかに黒く、しかも確実に二個の点として巖げんとしてい

る。小さく小さくなる。一個は消えても、一羽の英姿はいつまで

もいつまでも残つてみえる。その向うむこの空のぬれた黝朱うるみの乱雲、

それがやがては褐かつとなり、黄となり、朱あかに丹に染まるであろう。

日本ラインの夕焼けにだ。

あ、白帝城が見え出した。

香木峡から四十分、彩雲閣の河原に着いて、^{あが}上ると、その白帝園のカンツリー・クラブの前へ、無料休憩所の方から、驚いたスリードで大型の昆虫の黒に^{あい}藍の自動車のはしつて来た。ハンドルを両手に、パナマを^{あみだ}阿弥陀に頭の毛を振り振り、例の快活な笑いの持ち主だ。

「や、万^{ばんざい}歳、勝負なし」

三

「ほら、坊や、さよならだ、帽子をお振り」

「さようならア——」

「もひとつ」

「さようならア——」

下りの高瀬舟に坐っているのは私たち親子と雀のお宿の主人との三人である。

彩雲閣の二階からは盛んに白いハンカチーフがゆれて光る。女中たちである。

私たちも一寸芝居気を出して、ちよつとしばいぎパナマやすずめずきん雀頭巾を振る。童

話の中の小さな王子のお蔭で、ほか朗らかに朗らかに私たちも帽子が振れるというものだ。

私たちは下る。くだ 赤い雌松めまつの五、六本をあしらった二重舞台の楼ろう
うかく 閣が次第次第に白帝城の翠巒すいらんに隠れてゆく。ちらとまたその
 隙間から白いひらひらが見えたかと思うと、また老樹の桎かしや楓かえでの
うつそう 鬱蒼たる枝の繁みに遮られてしまう。と、それつきりで、八月
 八日は午前十一時の閑かんじゃく 寂なせみ時雨しぐれになる。日本ラインとの
 お別れである。

水道の取入口も過ぎ、西谷にしたには迎帆楼げいはんろうの前も過ぎた。あの前
 で昨日の人だかりというものは昼の花火の黄煙菊おうえんきくよりも埃ほこりを
 あげた。丁ちよんまげ鬚まげ鬢かづらの赤陣羽織あかじんばおりに裁付袴たつつけばかまの爺おやじどもが拍子
かね 木に鉦や太鼓でライン酒しゅとかの広告ひろめの口上こうじょうをまくし立てる。
のぼり その幟の蔭から、盆の上のリキュウグラスに手を出して無料じゃ

無料じやという赤いのを一杯試し飲みして見たところで、「これは焼酎しょうちゅうかね」と聞けば「いや別製でなも、原料水は、へへん、ラインの水で」と扇を叩いた。「赤いのは」と聞けば「色で染そめやしたで」とまた扇を叩いた。色は樺太かばふとのフレップ酒に似て、地の味はやはり焼酎の刺激がある。土地の名産忍冬酒にんとうしゅは味淋みりんに強い特殊の香気を持たしたものらしい。

それは兎とに角かく、舟は今、三光さんこう稲荷の下にかかつて来る。三光

稲荷の夏祭は津島祭の逆鉾さかほこ舟——一年十二ヶ月は三百六十五の

提灯ちようちんを山と飾った華麗と涼味とを極めた囃子舟はやしである——に

ならつて、これもおなじく水の祭が極彩色ごくさいしきでと町長の話であつた。今後はいよいよ盛んに奨励する意向にも聞いた。民衆の祭は

盛んであるほど郷土の意気が勇む。水を祭るは水郷すいきょうのほこり
 である。精華である。私の郷国きょうこく筑後の柳河やなかわは沖の端の水天
 宮の水祭みづまつりには、杉の葉と桜の造花で装飾され、簾すだれを巻き蓆むしろ
 張りばの化粧部屋を取りつけた大きな舟舞台が、幕あいには笛や
 太鼓や三味線の囃子はやしもおもしろく町の水路を三日三夜よさも上下す
 る。そうして町のかわるたびに幕をかえ、日をかうるたびに歌舞
 伎の芸題げだいも取りかえる。そうした小運河はまた近在の小舟でうず
 まってしまふ。その五月の喜ばしさというものはなかった。まこ
 とに水は祭られてよい。夏は、風は、魚うおは、岩は、砂は、この日
 本ラインにしていよいよ煌々こうこうと祭らるべきである。その三光さんこう
 稲荷の水の祭もほんのすこし前に過ぎたばかりだということであ

った。

「坊や、昨夜の花火は奇麗だったね」

「うん、奇麗だったね」

ちようど河の中の白い三角洲の横を舟はまた走りつつあつた。

その洲には赤い旗がひるがえり、数百の花火筒が林立した前の日であつた。

隆太郎はその朝、従兄弟たちと名古屋から来た。彼の母はどうとも見えないことになった。すっかり期待を裏切られた幼童の失望はどれほど大きかったか。それでも彼は堪えに堪えていた。一生懸命に口を結んで泣くまいとしていた痛々しさが父の胸にはひたひたと響き返した。この暑さにこの幼い子を十余日の旅に連れ

あるくことは危険でもあり、少々果斷かだんにも過ぎた。それで来られるものならその母に預けて、私は単独に気軽にあるき廻ろうかと思つても見た。何でも余りに便通がないので、名古屋では挙こぞつて心痛したということであつた。「そりやあね、庭の鳳仙花ほうせんかの中か、裏の玉蜀黍とうもろこし畠ばたけにでも連れてきやよかつたんだよ」と私は三高生に笑つて見せたが、「それでも下剤薬を飲ましたので通じましたよ」とその甥おいがまた笑い出した。そうして、「ちよつと泣きましたよ」と顔を赤くした。病氣にでもなられては困るが、兎とも角かく、それでは一緒に連つれて行こうとなつた。よしスパルタ教育だ。この旅行は隆太郎にとつては生れて初めての意義ある見学であるのだ。幼児の叡智えいちと感情と感覚と意志との上に増大し生長し洗練

さるる何物かは寧ろ危険以上のものであるに違いない。で、私も

決行したのであった。

「や、花火の碗殻わんがらだな」

炸裂さくれつした後の黒い半分ずつの碗殻のちが水にばかりぽかりと漂つ

ている。おしどりのようだ。

まったく、長い、薄明はくめいがいよいよ暮つくして短い夏の夜よに入

つてからの花火の壮観はすばらしかった。菊花壇きくかだん、菊先乱きくさきらんぱ

発つ、二尺玉、三尺玉、大菊花壇、二百発三百発の早打はやうち、電光

万雷、銀錦ぎんにしきへんか変花きくさきにしきぐんちよう、菊先錦群蝶きくさきにしきぐんちよう、青光残月、等々等。燦さ

爛らんたる孔雀玉の紫と瑠璃るりと、翡翠ひすいと、青せい緑りよく。紅と緑の光弾べに

円蓋えんがい、火箭ひや、ああ、その銀光の投網とあみ、傘から下かさおろし、爆裂し、奔ほ

んりゅう 流し、ぶんし 分枝し、くさく 交錯し、ふんらん 粉乱し、ちようじよう 重畳し、からかさおろ 傘下し、
 傘下し、傘下し、八方に爛々らんらんとして一瞬にしてまた闇々あんあんたる、
 清秀とも、鮮麗とも、けんらん 絢爛とも、すうび 崇美とも、きようしや 驕奢とも、たと 譬
 うるに言葉も絶えた。加えて波上の炎々たる水雷火、その魚
 よりんか 鱗火、うぶね 連弾光、かがり 鵜舟の篝、まんとう 遊覧船の万灯、ちようちん 提灯、手投げ
 の白金光、五彩の変々たる点々光、りゅうしゆ 流出柳箭、けだし参
 と信しんとの花火芸術の最高を極め精を尽くし神しんを凝こらしたものであ
 った。

空には月明らかに雲薄く、あまつさえ白帝城いらかの藁はくあと白堊ことを耿うこう
 々と照らし出したのである。

然しかしました、そうした一夜の歓楽も過ぎた。祭りの後の果敢はかなさ、

そのあわれさは、この水にしてひとしおである。

舟はいま夕暮富士を右手に、その三角洲の緩い彎曲線に沿うて左寄りの分流を走りつつすべりつつある。

阪下さかしたという、ごろた石の土手の斜面に舟夫はちよいと舟をと

める。十二、三ばかりの、女の子が前かがみに何か線の細かな菜

の葉はをすすいでいる、芹せりかときいてみるとかすかに顔を赤らめな

がら、人參にんじんの葉だという。その傍で半襦袢そばはんじゅばんの毛脛けずねの男たちが、

養蚕ようさん用の円座えんざをさっさと水に浸して勢いよく洗い立てる。空から

の高瀬舟が二、三艘ぞう。

船はまた岸を離れる。振り返ると、おお何と典麗てんれいな白帝城で

あろう。蓊鬱おううつたる、いつも目に親しんで来たあの例の丘陵の上

の、何と閑雅なかんがいらか薔、白いろうかく楼閣、この下手からしもて観るこの眺めこそは絶勝であろう。私はつくづく下つて来てよかつたと思つた。

「坊や、ほら、お城が見えるよ」

「ほんとだ、お城だ」

だが、その白帝城とも、じきにお別れである。

分流は時に細い早瀬となり、ろてき蘆荻に添い、また長い長い木津のきづ堤の並木について走る。堤には風になびくしだれやなぎ枝垂柳も見える。純朴な古風の純日本の駅亭もある。そうして昔むかしづくり作の農家。

私たちはまた振り返る。「さようならお城」はるかのはるかの白帝城。

船はまた大江たいこうの河心かしんに出る。石船の帆が白く、時に薄い、紫

の影の層をはらんで、光りつつ輝きつつ下をまた真近を、群れつつ、離れつつ去来する。

それよりも、実に驚いたのは、宏大な三角洲の白砂はくさのかがやきであつた。実に白い、雪以上の、白以上の強い、輝く白、その

「白」がその全面をもつて、直射する、また汜濫はんらんする日光を照

りかえず、その「白」の美感は崇高そのもの、神采しんさいそのもので

なくて何であろう。常に「白」の氣韻きいんを香氣を幻惑を愛する私に

とつて、これほどのこうごうしい魅惑はむしろ私を円寂えんじやく境

の思慕にまで誘う。私はこれほどまでの石や砂の白い実相をかつ

て見たことがない。

そうして汪洋おうようたる本流、輝く白のあなたの分流、対岸の、ま

た下流の煙霞^{えんか}、

「海、海」と隆太郎は叫ぶ。

ところで、その子はビールの空瓶^{あきびん}を舷^{ふなべり}から、ぽんと水に投げ
る。瓶は初め茶褐^{ちやかっ}に、後は黒く、首^{のち}だけもたげもたげして流^{ながれ}に
浮く。青の紫の鴨^{かも}の首、うしろにうしろに遠くなる。それほど舟
が早いのだ。

「まだあかないの、まだあかないの」

「坊や、そんなに飲めるかい、待ってくれ」

それでも空^{から}のビール瓶がほしさの、立ち上^{あが}つては両手に、しゅ
うつとコップにむりやりである。

「困るよ、困るよ、ほら飛行場が見える」

と、岸には黒人種風景の、裸の童子と童女がいる。松と草藪くさやぶと水辺すいへんの地面と外光と、筵目むしろめも光っている。そうして薄あかい合歡ねむの木の花、花、花、そこが北島、向う遥かむこはるが草井の渡し。前波まえなみ不動の幽雅な小丘しょうきゅうを右に見て、また耳に聞く左は梭おさの音のしずかな絵絹織えきぬる松倉の里である。

と、本流の水はまた一つの三角洲を今度は左に押しつめて、広く斜ななめに、河幅を右へ右へと開いてゆく。おお、また渺びようびよう々として模糊もこたる下流。

笠島の渡しというところを過ぎる。右の斜面の鼠色じみた帆の幌こやの小舎の内では、輝ふんどしひとつの船大工が船の内側を河心かしんへ向けて、ととんとん、ととんとんと釘を打ち打ちしている。ほればれ

としたものだ。遊ぶようなその鉄槌かなづちの手。

私たちの舟はまた櫓ろの音も緩く緩く波上に遊んでゆく、流れはもはや急ではない、大江たいこうの浩蕩こうとうとした漣さざなみである。

北方村本郷きたかたほんごうというところで、私たちは三艘ぞうの水車船を見た。

また下流で二艘の同じような船を見た。船には家があり横の両側には二台ずつの軽い小板こいたの水車が廻っていた。内部には杵きねの音がし、小糠こぬかのにおいがこめ、男女の声がしていた。支那の戦車のような形の船であった。これらは流れの瀬の替わるにつれて、昨日は下しも、明日は上かみへとのぼるのである。簡素な情趣である。

「これは、童謡になるな」と、私は眺め眺めすれちがつてゆく。

東海道線は長い長い木曾川の鉄橋が近づいて来た。

「あ、あの右袂たもとが笠松の四季の里です、向うむこが雀のお宿」

そほうしへさき

素峰子は舳ふりに立つて、白に赤の黒の彩雲閣のフラフを高く高く

振ふりなびかす。ちようど鉄橋をくぐつて出たところである。見ると、

やや下手しもての左岸の松林の外では何かしきりに叫んで騒むれいでいる群

があつた。裸わらべの童たちである。童わらべヶ丘おかとはそのお宿の砂丘にかつ

てたのまれて私が名付けたものであつたが、こうしてちかぢかと
来て眺めるのは今が初めてである。

「呼んでますわア」

「君のとこの林間学校の子供たちだね。幾人ぐらい来る」

「昨年は百六十名ほど来ましたが、この夏は六十名くらいでしょ
うか、それに岐阜加納かのう竹ヶ鼻笠松の子供が一週に四、五回は先生

に連れられて参りました。そうです。五、七十名ずつ一ノ宮、奥町の子供も遊びに来ますで」

「それは盛んだな」と私はまた、一人が飛び、ひるがえ翻った向うの投とうす水台いだいの強いかがやきをうち見やった。警戒標の旗の先だけが、

その下の河心かしんに赤い点をうっている。雨後の増水に流されて位置を変えたのであろう。

おこし「起の水泳場というのはどこだね」

「ずっと下しもでなも」と蹲うずくまっていたのが、また立ちかける、先さき棹さおである。

おこし「起はどうもあかんで」と後あとの櫓ろの手が右斜へいささか引き気味に、ここで刻みかけると、何鳥か白く光って空をば過ぎた。

と、私たちの小舟は小豆色あずきのひろびろとした洲すの浅みに沿って、いきれたつ蘆あしや薄すすきのあいだにすれすれと横になってとまった。四季の里である。

と、その時、その裏の岸边に早くも出迎えていたその里の老主人と笠松の町長さんであつた。

そこで「とうとうお連れ申したで」と雀頭巾すずめずきんは素峰子の眼鏡が光つた。

「美濃側の笠松へ第一に舟は着けてお貰いしないと承知せぬで。尾張側の雀のお宿は後あとまわし後まわし」で笑つて、「木曾川下りといえは昔はこの笠松までときまっていたものだ。日本ラインばかりで独占するとは怪けしからん」とその家の主人がいきまいたと、

それは昨日聞いた話であつた。そう聞いて、今日の眺めに接すると、全くそうに違ひないと思へた。河口はとにかく、犬山からこの笠松までの悠容^{ゆうよう}たる大景を下流にして、初めて中流の日本ライン、上流の寢覚^{ねざめ}、恵那^{えな}の諸峽が生きるのである。河川として他に比類のない多種多様の變化が、そうしてそれらの綜合美が。

水に臨んだ広い楼^{ろう}上^{じょう}に登つて、私は下りに下つて來た鉄橋の遙^{はるか}を顧^{かえり}みた。蘇川峽の奇勝、岩壁の鷹^{たか}、白帝城、雨と朱の夕焼けと花火と、今はただ眼に入るものは雲である、江陵である。つい一、二時間前に見た白く輝く三角洲、分流の早瀬、船大工のほとんど、水車船の野趣、何だか遠い日の向うの煙霞^{えんか}と隔たつてしまつたような気がする。

私はまたこの晴れた日の大江たいこうの下しものあなたを展望した。長堤は走り、両岸の模糊もこたる彎曲線まげんの末すえは空よりやや濃く黒くろんで、さて、花は盛りの紅べにと白とのこの庭にわの百日紅さるすべりの近景である。幽雅な繁みと茶亭と、晩夏の日射と蟬せみの声と。籐とうの卓かごと籠かごの椅子と、冷ひやした麦茶のコップと鉢ひちまきの緑の羊羹ようかんと鮎あゆの餅菓子。

東と南とに欄干てすりは繞めぐり、廂ひさしにはまた藤ふじの棚がその葉の青い光線から、おなじくまだ青い実さやの莢すじを幾条も幾条も垂すじらしてはいるが、そうして昼間の岐阜提灯ちようちんにもが、風はそよともしないのである。

暑い、なかなか激しい。蠅塗ろうぬりの白い団扇うちわが乱れ出した。

午後一時。見おろす一面の河幅は光り、光の中に更に燦々たるものが光つて、その点々を舷側に、声なく浮ぶ小舟がある。小舟には一、二の人かげの水にうつつて、何やらしきりに棹で河心を探っている。それは明るいしずかな画趣である。河底の砂にうもれた「木はし」をあさるのだそう。な。「木はし」は流木の髓である。と聞いた。洪水に押流されてきた樹木の磨き尽くし洗いきくされた末の髓である。焚木としてこれほどのものはなからう。烈々として燃え滓ひとつ残らないという。河畔の貧しい生活者にもこうした天与の恩恵はある。

うち興じていると、「しこらん」という土地の名菓が出る。豊太閤が賞美してこの名を与えたそうである。形は兜の鍔のごとく、

かおりは蘭らんのごとしというのだそう。略して「しこらん」。私は和蘭オランダ陀語かと思つた。おこしの類るいで、細く小切こぎりにした、かりかりと齒にあたつて、氣品のある杏仁きょうにん水の風味がある。

この笠松はその昔「葦あしの洲す」と称えた蘆荻ろてきの三角洲で、氾濫する大洪水の度たびごとにひたつた。この狐狸こりの巢窟そうくつを発あばいて初めて拓ひらいたのが三ツ家みの漂流民だと伝えている。その後秀吉が築堤してから、元は尾張に属していたのを何か心あつて美濃の所領に移したものだ。と、「旧幕の頃には天領として郡代ぐんだいが置かれたものでして、ついこの下しもの土手に梟首場さうしきの跡がございしますが」と町長、椅子から伸び上あがつた。

鉄道開通以来、土地の人が頑固で、折角せつかくの停車場の設置がえんを肯

ぜなかつたばかりに、木曾下流の渡船場として殷賑いんしんであつたこの笠松街道もさっぱり寂れてしまつたといふことであつた。

この四季の里は俳名馬好ばこうと号した常に馬を楽たのしんだ風狂の伯樂ばくろくが初めて営んだものだそうであつた。その馬好ももう五十年前ぜんとかに亡くなり、今は県會議員である当主が老後の樂みに買取つて、おなじく幽雅な料亭としてその跡を承うけ継いでいる。

じいじい蟬せみがまたそこらの木立こたちに熬いりつき出した。じいじい蟬の声も時には雲と梢こずえを閑しずかにする。

進められるままに私は隆太郎と階下したの白い浴室にはいる。何かの蔓つるが葡萄はつた窓から、覗くと蘆荻ろてきが見え、河面かめんが見える。白い浴槽の内では、そこで私が河童かつばの真似をする。隆坊はきやつきやつ

と逃げあがる。

「昨日はおもしろかったかい。岩がたくさんあつたろう」

「うむ」

「お猿がいなかった」

「いなかった。僕、綺麗な銀のおしっこをしたよ」

「ふうん」とその父は乱れた髪の毛を石鹼シャボンで洗いかける。

実は宵よいの花火までの間を是非ぜひその子にも見学させて置きたいと

思つて、甥おいたちに連れて出てもらった。そこで土田どたまで電車で、

香木峡こうぼくから舟でこの父とおなじに、日本ラインを下つて来たの

であつた。

「何でもよく見ておくんだ。今度来てよかったね」

「よかつたね」

上^{あが}ろうとすると、きさくな女中が大きな桃色のタオルを両手にふうわりとふくらまして来た。

「さあ、かわいいお坊っちゃん、お拭きしましよかなも」

「いやだ」という裸のを、きゅつとかき抱くようにする。逃げかかる。そうなると、いよいよ女中もかまってくる。「ね、いい子だなも、いい子」さあ小坊主怒るまいか「馬鹿野郎、こん畜生」爪で引ツ搔く打^ぶつてかかる、彼は彼で一個の独自の存在であり、個の人格として取^{とりあつか}扱^{あつか}われないかぎり、少^{すく}くとも自尊心を傷つけられたと感じたろう。狂人が狂人としての待遇を受くればきつと怒る。おなじ心理で、幼児もあまりに幼くちやほやされると憤^{いきどお}

る。童謡の創作にもここはよほど注意すべきところだ。「うつちやつて置いてくれたまえ、自分で拭くから」と私は声をかけた

「そうかなも、気の強いお子はんやなも」

二階には上ったが、隆太郎余憤あがが晴れないと見えて、窓の障子

紙をぴりぴりぴりと裂き初める。だが、こちらは堆うずたかく持つて出さ

れた画帖や色紙や短冊をそうはばりばりとやる訳にはゆかない。

少憩のちの後、私たちは立ち上あがった。対岸の雀のお宿を訪ねようというのである。

「お坊っちゃん、早くお帰り、今夜はわたしがだいてあげるぞなも」

「いやだ、僕、北原白秋と寝るんだ」

「へへえ、この子はん、変つてやりますなあ」

自動車走り出した。

雀のお宿の素峰子そほうしは、自こら行乞子こうきつしと称している。かつては書

店の主人であつたが、愛妻の病没により、哀あい傷しょうの極ほつは発願がん

して、奮ふるつて無一物の真の清貧に富もうと努めた。一灯園いっとうえんにも

はいつた、その木曾川橋畔に現在の学園を創立するまでの辛苦は

並々でなかつたらしい。ただこうした事業は氣を負いやすいもの

である。過ぎれば俗情わざわいの禍わざわいが来る。童ヶ丘わらべおかがどれほどの童ヶ丘に

なりきたつたか。この機会したしに親したしく観て置きたいと私は思つたので

ある。

雀のお宿の位置は笠松の対岸になる。低い砂丘のその松原は予

想外に閑寂かんじやくであつた。松ヶ根の萩はぎむら、孟宗もうそうの影の映つた
 萱家かやの黄いろい荒壁、機はたの音、いかにも昔むかしの嘶しばなしの中の鄙ひなびた村
 の日ざかりであつた。薤むしろなどしきちらして、郵便配達夫までが仰
 向けに昼寝している。その傍そばに杉の皮で葺ふいた風流な門があつた。
 額には青い字で掬水園きくすいえんと題してあつた。縁側えんがわや見透みとおしの狭い
 庭には男女の村童たかが群たかつて遊んでいる。玄関の左には人間愛道場
 掬水園の板がかかり、ふり仰ぐと雀のお宿の大字だいじの額に延命十句
 観音経まで散らして彫り、右には所用看鐘かんしょうとして竹に鐘がつ
 るしてあり、下には照顧しょうこ脚下きゃつかと書してある。けだし寺であり、
 学園であり、在家であるというのだろう。ただ趣味としての風雅
 が形式として勝ち過ぎる。寧ろ飾むしらぬがよくはないかと私はいつ

た。仏間が教室で良寛和尚を齋いつぎ、小さな図書室が表に、裏には琅玕ろうかんそう荘の別棟がある。琅玕荘では男女の小学教師たちが二、三十人ほど集まって私を待っていた。私は民謡や童謡の話などをし、すぐとまた席を立った。

松林にも腕わんぱく白らが騒いでいた。良寛堂の敷地には亭ていてい々たる赤松の五、六がちようどその前まえひさし廂ななめの斜に位置して、そのあたりと、日光と影と、白砂はくさと落松葉おちまつばと、幽ゆうじやく寂ない風致を保っていた。

「こないいいところが、対岸にあらうとは思わなかった」と四季の里の主人も感嘆した。「とにかく、よくこれまでにやりとおして来た、見あげた」と私も微笑した。然しかし、これからが大事であ

る。形式が精神を超えると名利めいりの家となる。「素峰そほう、これからや
かましくいうぞ」と私は笑った。

私たちは桑畑くわと松林の間を木曾川の左岸に出た。また松林があ
った。テントと投水台と。

西には養老の山脈、遥はるかには伊吹山、北には鉄橋を越えて、岐阜
の金華山、幽かすかに御岳。つい水の向うむこうが四季の里の百日紅さるすべり。

「さあ、これから帰って一杯差上げさしあますで」とその老主人公がさ
つさと踵くびすをめぐらした。

藤棚の多い四季の里の一夜の饗宴には土地の警察署長や農会長、
旧知の歌人の黙々子もくもくしなどが加わった。私たちは幾度か庭の茶亭か
ら茶亭へ席を代え代えした。夜がふけて私はたったひとりで仰向

きに胸や腹をつん出して眠りころげている隆太郎の蚊帳かやにもぐりこんだ。そうして、そのでつかちな毬いくり頭がをはずれた枕へ持ちあげ、借着かりぎの寝衣ねまきの前を深く深く合せてやると、そのままぐつすりと眠ってしまったて、すぐと河霧かわぎりの白い白い夜あけが来た。

私たちはその翌日、養老へ立った。そこで二泊、名古屋に引き返して一泊、それから恵那えなへ行つた。

四

八月十二日、午後五時。

恵那峡口は遊船会社附近の鉄橋風景である。対岸に簡素な二階

建ちの洋館が一つ、清流を隔てたこちらの土手の雑木、草藪、岸には空色に白のモーター・ボート、赤い線のエのフラフをひるがえした屋形船。それに乗り込んだ私たち一行——私と隆太郎と同伴の素峰子^{そほうし}、その義弟のT少年、それにその地の「山峡」の歌人たち七、八子^し——である。肉いろの、緑の、桃いろの、パラソルを畳んで、水際に蹲^{うずくま}った浴衣^{ゆかた}の女学生らしいのが二、三人、これらは私たちの連^{つれ}ではない。たまたま雲のごとく水鳥のごとくに現れて、この風景を明るく可憐に点彩したまでのことである。

旧暦は盂蘭盆^{うらぼん}の十五日、ちょうど今夜は満月である。空ははれ、風は爽^{さわ}かに、日の光は未だ強い。その良夜^{りょうや}の前の二、三時間を慌^{さわ}ただしい旅の心が騒^{さわ}めきやまぬ。駅から駅への電話が、この中

津川で行先不明の私たちをやつと捉えると、直すぐにも引き返さねばならぬ重大用件を取りついたのである。で、上流の福島や寢覚ねざめの床探勝とくの予定も中止すると、どうでも明みよう十三日の朝には此処ここを立たねばならなくなった。で、日の暮までの僅わずな時間を屋形船はモーター・ボートのぼツぼツぼツに曳ひかせて、大急ぎで恵那峡一帯を乗り廻ろうというのである。

席が定まつてから、「おや、あの印刷屋さんはどうしたね」と、私は驚いて笑った。多治見たじみにいち早く私たちを出迎えてくれて、それから中津川に着くまでの汽車中を分時ふんじも宣伝の饒舌じょうぜつを絶たなかった、いささか多けものへんの恵那峡人Yという、鼻の白くて高い瘦せ形の熱狂者が、いつのまにか掻き消すようにいなくなった

ものである。

「あはは、またお出迎いでさあ、何でも活動の撮影団が来るとか
いつてましたから。とても夢中で」

とその従兄いとこの民謡詩人がツルリと禿はげ上あがったその前額ぜんがくを指で
弾く。

「ほう、いそがしいね、愛郷心もあそこまで行けば命懸けだ」

何でも八景投票の恵那峡の騒ぎというものは凄すさまじかったらしい。
うっかり悪口でもいおうものなら殺される。

と、雲と山と水との四囲の風景が走り出した。

「やれ飛べ観音というのは」

「もっと上かみです。惜おしいことしました、ゆっくり御案内できないで」

光る、光る、光る、光る。銀、銀、銀、銀の水すい面、水め面——

「あれが御番所ごばんしよの森です」

幽邃ゆうすいな左岸の林に釣人がいる。一人、二人、三人、四人。麦む稈ぎわらぼう帽で半シャツ、かがんで、細い棹さおの糸をおなじくしんかんと

水に垂らしている。木の影が老おい緑みどり色に澄んで、ぴちりぴちり

と何か光るけはいがある。鯉こいや鮠はえを釣るのだという。あの森には

また鶴が棲んでいたこともあったと誰たれかがいった。木曾谷くだの下るい筏かだを見張った御番所の跡であるらしい。

苗木の城址じょうしはこれに對して高く頂上の岩層にうら寂さびた疎林がある。日本唯一の赤壁せきへきの城の趾あとがあれだという。この淵ぬしの主

である 蟠ばんりゆう 竜りゆう が白聖はくあを嫌つたという伝説がある。

私は「恵那峡 舟しゅうゆう 遊案内」と見較みくらべ見較べ、いそがしい、い

そがしい。

風、風、風、風。

光る、光る、すばらしく光る朴ほうの葉裏である。

翠巒すいらん、翠巒。

下手しもての空際そらぎわには高压線の鉄塔が見える。大同電力のダムで堰せ

かれた河流は百八十尺の高さにその水深を増したというのだ。

風、風、風、風。

水は波は、ともすると逆流する。河というよりたんと湛たたえ
た湖水めんの面である。兩岸には、木の梢こずえや、思いもかけぬ枝の半なかば

上^{うえ}などが水に露われて、さながら洪水にひたされた林相である。

こうして急流は變じて深潭^{しんたん}となり、山峡の湖水となり、岩はそ

の根を没して重^{ちようじよう}疊^{きしよう}奇峭^{おもむきく}の趣を少からず減じてしまったと聞

いた。然^{しか}しながらその為^{ため}にまた水は紺碧^{こんぺき}を加え、容量は豊富に

深沈^{しんちん}たる山中の幽寂境を現出した。

この恵那峡は木曾川の中流である中津川駅の傍^{そば}から大井町に至

る水程三里の間にあつて、岐蘇^{きそ}溪谷中の最勝の奇景であるといわ

れている。日本ラインの奇岩怪石は多く相迫つて河中聳^{しょうりつ}立す

るが恵那峡の岩石美は寧^{むし}ろ山上にあり千仞^{せんじん}の懸崖^{けんがい}にある。

「あれが青崖^{あおがけ}」

眼を遮るは濃青^{のうせい}の脈々たる岩壁である。その下の鞍掛^{くらかけ}岩。

その左は展ひらけた下流の空の笠置山かさぎ。雲だ、雲だ、雲だ。

右には武光岩むこう、鬼岩がま、墓岩がま、帽子岩、ただ見あぐる岩石とつきの突つつそう
屹相らんさくそう、乱錯相、飛躍相、蟠居相ばんきよそう、怪異相、跌坐相ふざそう相相であ
る。点綴てんてつするには赤松がある、黒松がある、矮樹わいじゆがある、疎
林がある。

光る、光る、光る、光る朴ほうの葉裏である。

ぼツぼツぼツぼツ、煙、煙、煙。

「や、あれが月つき待まちヶ丘おかです」

「今夜の満月はさぞいいだろうな」と私はその丘の空際そらぎわをふり
仰いだ。それにしてもあまりに慌ただしい舟の速力である。

「誰たれか踊らないか」と一人がビールをあおった。

「あ、あれが村^{むら}雨^{さめ}の滝です」

峡中の美橋、美恵橋^{みえ}が現れて来た。一名禪橋^{ふんどし}というのがそれだ。禪の節約と馬糞^{ばふん}の拾^{しゅう}集^{しゅう}とから得た利益を積み立てて架橋したのが大正三年の洪水で流出した。

「禪橋が落ちた。と歌^{うた}ったものです」で、みんなが笑い出した。今のは鉄橋。

「山峡」同人の指呼^{しこ}はいよいよ急がしくなる。天狗岩です。ほら、枕石だ、後阿弥陀岩^{うしろあみだ}だ、砲台岩岩岩岩。

そこで品^{しな}の字^じ岩^いというのが眼界^{そび}に聳^{そび}えて来る。文字どおりの角^{かく}の巨岩が相対し重^{じゅう}積^{せき}して、懸崖^{けんがい}の頂きにあるのだ。ただ私にはそうした奇趣に興味を持たぬ。画^がとし詩とするには索然^{さくぜん}た

るものがあるからである。

その本流と付知川との合流点を右折して、その支流一名緑川を遡航する舷に、早くも照り映ったのは実にその深潭の藍碧であつた。日本ラインにもかつて見なかつたその水色のすさまじさは、まことに深沈たる冷徹そのものであつた。山中において恐らくいかなる湖面といえどもこれほどの水深を蔵する凄みは少いであらう。大同ダムで堰き止められて、本来の懸崖の三分の一以上、二百仞も高く盛り上つたその水際には、すなわち現実における魚は緑樹の梢にのぼり巉岩は河底の暗処に没して幽明さらに分ちがたい。しかもまた峭々として相迫つた岩壁の間に翼を休めた蒼い蒼い真上の空の一角である。雲は白く綿

々として去来し、鬱氣はふりしきる蟬の声々にひとしおに澄みわたる、その峡中に白いボートを漕ぐ白シャツの三、五子がいる。この奇異な対照こそ寧ろ観るべからざるを観る一種の戦慄をさえ感ぜしめる。

朝鮮金剛の勝に私たちは当面したのである。この溪谷のいさぎよくして閑かな、またこの重畳たる岩峭の不壞力と重圧とは極めて蒼古な墨画風の景情である。夫婦岩、蓬萊岩、岩戸不動滝、垂釣潭、宝船、重ね岩、宝塔等々の名はまたあらずもがな、真の気魄はただに天崖より必逼する。

安子穴というのがあつた。白狗と白馬との天正時代の伝説がある。後、お安という女が零落してここに玉のような童子を

育てた。以前は岸边伝いからどうにか上れた^{のぼ}であろうところも今は変じて湖上の絶壁となつた。

船止めの葦毛潭^{いもうたん}から引かえして本流に出る。

源齋巖^{げんさいがん}が左に、対^{むか}つて高く聳^そつ天柱岩がある。このあたりか

ら丘陵の間はやや斜面に展^{ひら}けて赤松の細い幹が縁^{えん}辺に林立し、

怪奇な岩層の風致に一種の繊細味を交^{まじ}えてゆく。対^{たい}松崖^{しようがい}はこ

れと映^{えい}照^{しょう}する。

続いて、私たちの屋形船は屏風岩の岩壁にひたひたと舳^{ふなべり}を寄せ

た。朝鮮金剛^{しんこう}の勝^{しょう}以上の大観である。参差^{さんし}たる松^{まつ}ケ枝^え、根^{あが}に上り、

横^はに葡^はい、空にうねつて、いうところの松籟^{しょうらい}般^{いはん}若^{にや}を弾ずるの

神境^{しんきよう}である。

鬱氣らんきと水光すいこうと変幻する雲、雲、雲。

右には蕭々しょうしょうたる滝がある。あ、水車がある。釣人は幽かすかに棹さおをかついで細い径こみちをのぼってゆく。

簡素な別荘がある。近代の料亭もある。

鉦鼓淵しょうこえん、盗人谷ぬすど、その天上の風格は亭々ていていと聳しょう立りつする将軍台、また巖げんとして平たいなる金床きんしょうだい台。

金色こんじきの日光。

と、展望がここで明るくなって左に船着場があつた。エの朱線のフラフ、屋形、モーター・ボート、輝く波々、棧橋わらべの童、風、風、風。

木の間まがくれの茶亭の下へ、きて上あがつて、ズボンの釦ぼたんをはずす

男もいる。

その正面こそ大同電力の白い白いダム堰堤である。古典的の幽邃と奇峭とはここに變転して、近代の白と灰銀との一大コンクリート風景を顕現する。水はまんまんとして、そのダムに堰かれて湛え、橋梁の連灯はまだ白く玻璃球のみ光つて、丘陵の上、また水辺に反照する鮮明なる洋風建築、このダムこそ東洋一の壯觀だとせられる。その堰堤の高さ百八十尺、長さ一千尺コンクリート、貯水量十億立方尺、堰堤上流三里十二町、面積百七十一町、水量流域百二十三方里、発電機四台、励磁機二台、電力四万二千九百キロワット。惜しむらくは下流に立つてこれを仰視し得る機会を得なかったことである。

私たちはその壮麗なるダムの前の広々とした湖面を一周して、さて、いよいよ帰路についた。急速力である。

遊船会社の前の峡きようこう口は高い高い白い石の橋台に立つて、驚くべき長い釣つり棹さおを垂れている人影も見えた。橋の下にも幾いく群むれか糸を投げて魚うおを待つ影も見えた。

夕焼けが来た。さわりさわりとその肩の長い棹ゆみを弧に、その先さききを線路につけて、その鉄橋の枕木の上を拾い拾い渡る男も見えた。

私たちは上あがつて、撮影をすると、すでに灯ひのともった臨時電車にぞろぞろと乗り込む、走る、走る、走る。

私は思った。恵那峡の幽邃ゆうすいはともすると日本ラインの豪宕ごうとう

を凌ぐ。^{しの}ここまで上^{のぼ}つて来なければ木曾川の綜合美は解せられない。すばらしい、すばらしい。

さて散策して見た中津の町は電飾が鮮^{あざや}かではあつたが、いかに^{ほつくく}も北国の小都市らしく、簡素で、また陰暗たるところがあつた。

その晩、梅信亭^{ばいしんてい}で饗宴^{もよお}が催された。この町の若い美技^{びぎ}が輪になつて、そこで、紅^{あか}い頭巾に花笠、裁^{たつつけばかま}付袴^{はかま}のそろいで、本場

の木曾踊りを踊った。だがあまりに巧緻^{こうち}に過ぎ、柔軟に過ぎた。

「民謡とはそんなもんじゃない、おうい、俺^{おてほん}が御手本を示してやる」私も酔っていた。隣室に飛び込むと、それ何、それ何、それ何という騒ぎになった。

紅い頭巾で、背中に花笠で、裁^{たつつけばかま}付袴^{はかま}で、やあよいかとゆら

りと出て行くと、若い町長初め、一同がやんやと拍手した。

そこで、ちよつと紅い頭巾の頭を搔いて、私も笑い出した。大胆というより無鉄砲なのだ。

「おうい、坊や、いっしよに踊ろう。ヨイヨイヨイのヨイヨイヨイだ」

この夜こそ旧暦の盂蘭盆うらぼんであつた。明るい明るい満月である。

青空文庫情報

底本：「日本八景 八大家執筆」平凡社ライブラリー、平凡社

2005（平成17）年3月10日初版第1刷

底本の親本：「日本八景―十六大家執筆」大阪毎日新聞社、東京
日日新聞社

1928（昭和3）年8月15日再版

※「船」と「舟」の混用は、底本通りです。

入力…sogo

校正：岡村和彦

2015年5月24日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

木曾川

北原白秋

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>